

## ドラマチックな会長職引継ぎ

前SRC会長 近藤節夫（32回生）

湘南高校ラグビー部OB会（SRC）初代会長・岩田明さんから、会長職を引き受けてほしいと唐突にお話をいただいたのは、1999年秋のことだった。すでに還暦は過ぎていたが、まだ現役サラリーマンとして何かと忙しい立場にあり、またそれ以上に私にとっては伝統ある母校のOB会長という重責を、実績のある岩田さんから私のような若輩者が継承して果たして務められるのか、他にもっと相応しい人がいるのではないかと悩み考え、岩田さんのお気持ちに逆らうようだったが、その時はお引き受けする気持ちにはなれず、申し訳ないと思いつつ丁重にお断りした。

ところが、岩田さんからその後度々お電話をいただき、「もうコンちゃんに決めたから、あんたが引き受けてくれないと困る。コンちゃんのほかにはいねえんだ」と何度も熱心な説得を受けた。「コンちゃんの人が、リーダーシップ、ラグビーへの愛情など、どれをとってもあんたより会長に向いている人はほかにいねえんだ。ラグビーがこのほか好きだし、息子さんもやっているし、国際人だし、周囲にいるOBたちからもコンちゃんが会長になるなら応援すると諒解を取りつけてある」とお世辞も交えて、もう外堀は埋めたと言わんばかりに執拗に口説かれた。とても私のわがままなぞ聞き入れてもらえそうな雰囲気ではなかった。

その当時私にとって会長職はやや荷が重く感じられ、まだとてもやっていける能力も自信もなかった。だが、それでいてあまりにも熱血的な艦砲射撃について根負けして、取敢えずしばらく考えさせてほしいとひととき時間をいただいた。

気障なようだが、ひとりカナダへ飛び、トロント（カナダ）から列車でハンツビルへ向かい、忍び寄る冬の気配にほとんど人影も見られなくなったアルゴンキン・オンタリオ州立公園内のコテージでブルージエイ（青カケス）と戯れながらじっくり考えてみたのである。

大自然に囲まれ静寂で広大な公園でひとり冷静に考えているうちに、これほどまでにOB会を立ち上げた功労者である現職の会長から熱心なお誘いを受けていながら、これ以上お断りしては、至らない私を見込んで推薦してくれた岩田さんの純粋なお気持ちと信頼を反って損なうことになり、むしろ岩田さんに失礼に当るのではないかと考え直し、遅まきながら清水の舞台から飛び降りる気持ちで会長をお引き受けすることを決断した。

お引き受けする気持ちを固めて早速トロントから絵葉書に会長をお引き受けしますと認めて郵送した。帰国して直ぐお電話すると、「やっと決めてくれたか。これで俺も一安心だ。カナダで決めたとは国際的で舞台回しが良いよ。SRCも国際的になったもんだなあ」とえらく上機嫌で、これからは自分も新会長を全面的にバックアップするから、ひとりでも多くのOBがSRCへ目を向けてくれるよう、また後輩たち現役チームの支援をしっかりとやってほしいと激励された。

こうして私は岩田明SRCC初代会長から第2代会長職をお引き受けすることになったのである。

そして、あの忘れもしない会長職引継ぎの日を迎えた。その日2000年元旦、母校におけるSRCC年次総会において、全出席会員の前で肅々と会長職を引き継ぐことになっていた。

ところが、その直前になってとんでもない驚天動地のハプニングが起きたのである。総会前に行われたOBチームと現役部員との練習試合を観戦しようと岩田さんともどもグラウンドへ向かって正面大階段を駆け下りて行った時、突然私の前を歩いてた岩田さんが大階段から足を踏み外し、前のめりになってあっという間に転落していった。ワッ！と悲鳴とも叫び声ともつかない大声をあげるや、階段を転がるようにしてそのまま頭からグラウンドへ全身を突っ込んでいったのである。あっという間の一瞬の出来事だった。周囲がうるたえ取り乱した中で、岩田さんの悲鳴とも呻き声とも聞きわけられない唸るような声が洩れてきて、岩田さんはそのまま頭を抱えたままグラウンドにうつぶせになってしきりに痛いと呼んでいた。大分酷い怪我をしているようだった。顔面からはひどく出血もしていた。そのアクシデントの一部始終を目の前で見てしまった私も些か気が動転したが、直ちに携帯電話で「119番」を呼び出した。まもなくして、新年の朝のしじまを破るように遠くからピーポー、ピーポーという救急車の甲高い音が聞こえてきた。

このハプニングによって、年次総会は急遽中止され、会長交替と新役員人事決定など諸々のセレモニーはなくなった。藤沢市の救急病

院・別府外科で私は病室のベッドに横たわったままぐるぐる巻きの包帯姿の岩田会長から、恰も辞令でも受け取るようにして会長に就任することになり、他の新役員人事については、「おい〇〇！お前は△△をやれ！」というように有無を言わせぬ乱暴な口利きで決定される有様だった。まさに前代未聞のにわか仕立ての仮総会となつてしまった。いま思えば、仮総会は類まれなドラマチックなセレモニーであり、奇想天外でSRCC史上後々まで語り伝えられる役員人事の決定だった。

あの衝撃的なドラマから時は移り、入野耕二副会長以下全幹部役員、並びにSRCC会員諸兄姉の全面的なサポートをいただきながらどうにか7年間会長職を務めた私は、2007年元旦総会において格別突発的なハプニングもなく、ごく自然に門田庄之助現会長に会長職のバトンを引き継いだ。

思い返すと岩田さんの思い出には、なぜかいつも特異で忘れがたい鮮烈なエピソードが付きまとっているように思えてならない。

つい最近まで使っていた私の携帯電話には長らく「119」の番号と時間が記録されていた。云うまでもなく、あの人、あの時、あの場所、あのハプニングの証人であり、救急車をお願いした時の運命的なナンバーである。この「119」を見る度に岩田さんが前のめりに突っ込んで行った、あの衝撃的なシーンが目に見えんできたものである。

半世紀以上に亘り湘南高校ラグビー部、並びにSRCCのために献身的に活動された初代会長岩田さんは、个性的で船乗りらしく

茫洋としていて、いつまでも岩田さんを知る人を懐かしくほのぼのとする気持ちにさせてくれる愛すべき先輩だった。心より「冥福をお祈りしたい。

合掌